

第3話 江戸幕府の創立

関が原戦後の処分にあらわれた家康の大胆さと細心。豊臣氏と徳川氏との位置の顛倒。完全に天下の実権を握った家康が、やがて征夷大將軍に任ぜられ、江戸に幕府を開いて、武家政治が再興する。

関が原の戦いはただ1日でかたづいたが、その結果は頗る重大でした。これまでは、ともかく天下は豊臣のものであって、家康はただ大老としてその政治を見ていたに過ぎなかったのだが、この時から一変して、名実共に天下は彼の1人の自由に任された。豊臣氏と徳川氏とが全くその位置を換えるようになったのです。

先づ差当って戦後の処分でしたが、これまで豊臣氏の政治を執る役となっていた大老も、奉行も、家康の外は殆ど皆戦敗者ですから、これは当然、家康1人の自由に任せる外は無かった。

西軍諸將の処罰

彼は先づ敵將の処分から始めた。

これより先、西軍の諸將は、大谷吉隆の外は皆逃れて、一時行方を晦ましていたが、間もなく小西行長は伊吹山の麓で捕えられ、石田三成は北近江の古橋村で捕われた。安国寺惠瓊もまた京都の六條で捕われた。長束正家は居城の水口(近江国甲賀郡)に帰ったところを池田輝政らに追い迫られて自殺し、島津義弘、長曾我部盛親らはそれぞれ本国に走り、宇喜多秀家は島津を頼って薩摩に落ちた。

このうち、三成、行長、惠瓊らは、いづれも首謀者でしたので、大阪、堺および京都の町を引きまわされて、六條河原で斬られた上に、自殺した正家の首と共に三条橋に梟首(木の上に曝す)された。10月朔日のことです。

この外、前に名の出た諸將で言えば、小野木公郷は自殺を命ぜられ、真田昌幸は、東軍に属した子の信行がその身に代えて助命を願ったので、死だけは許されて、その子の幸村と共に高野山に蟄居させられた。増田長盛は武蔵の岩槻に押し込められ、大友義統は秋田に逐いやられた。宇喜多秀家は、(これは後になっての事だが)薩摩にいたことが慶長7年12月になって初めて分かったので、その翌8年に八丈島に流された。この時、彼は31才でしたが、その後、島に住むこと50年余り、83才で病死した。その墓は今も同島の大賀郷に在る。

これらの諸將の外に、領地を奪われただけのものは、長曾我部盛親、織田秀信、伊藤盛正、石川貞清らを始めとして中々多かったが、又、佐竹義宣や上杉景勝のように、降を請うて、領地を削られるだけで済んだ者もいた。即ち景勝は会津(百二十万石)から米沢(三十万石)に移されて九十万石を削られ、義宣は水戸(約五十四万六千石)から秋田(十万五千八百石)に移されて三十四万石近く削られた。

毛利氏の減封

しかし、最も馬鹿を見たのは毛利輝元でした。彼は前にも述べたように、本領安堵の保証を得た

第3話 江戸幕府の創立

ので大阪城を東軍の手に渡したのですが、家康がいよいよ大阪城に入るや否や、^{たちま}忽ち態度を一変して、毛利氏を滅ぼし、^{きつかわひろいえ}吉川広家に中国の1,2国を与えることにしようとした。輝元が三成らに身方して盟主となり、西の丸に入って政令を発したのみならず、一方、兵を伊予に出して^{かとうよしあき}加藤嘉明や^{とうどうたかたら}藤堂高虎の領地を^{おか}侵し、又、広島にいた^{おおともよしむね}大友義統を豊後（大分）にやって、その旧領の回復を計らせたりしたのを理由として処罰しようとしたのです。

毛利氏はここに^{だいきょうこう}大恐慌を来たして、^{いきどお}家康の不信不義を憤ったが、今となってはもう争うにも力が無かった。毛利氏の為を思えばこそ東軍に内通して、^{ひでもと}南宮山で^{きつかわひろいえ}秀元に戦わせなかった^{こと}吉川広家は殊に驚いた、彼は^{ふくしままさのり}福島正則、^{くろだながまさ}黒田長政に誓詞を送って執成しを頼み、^{とりな}輝元が亡びて自分が領国を得る心などは毛頭ないから、せめて毛利の名字だけでも立てられるようにしていただきたいと、必死になって運動した。やっとなんか功を奏して、10月10日に家康から、^{こう}輝元親子の身に別状無く、^{そう}防長の2州を与えるという誓詞が出た。

こうしても毛利氏は、従来の領地（百二十万五千石）のうち、備中、備後、安芸、因幡、伯耆、出雲、石見、隠岐の8カ国（八十三万六千石）を削られて、^{わづ}広島から山口に移され、僅かに周防、長門、の2カ国（三十六万九千石）を保つ事となったのだが、この時、^{たも}輝元は、まんまと家康にいっぱい食わされたのを^{いきどお}憤って、2カ国も返上しようといきまいたとも伝えられている。

島津の恭順

これに反して、うまくやったのは島津氏でした。^{よしひろ}島津氏は義弘が逃れて薩摩に帰ってから、一面、^{きょうじゅん}家康に対して恭順の意を表すると共に、国内では^{ぶびげん}武備を厳にして、もし家康が不当な処分でもしたら、断固としてこれを^{こば}拒み、いつでも敵の来攻に対して1戦を辞さない覚悟をしていた。このために、1つはその領地が遠い九州の果てであったからでもあるが、さすがの家康も、ついに手をつけることが出来ずに、薩摩、大隈、日向の3州にわたる本領はそのまま少しも削られずに済んだ。

東軍の諸将の行賞

次には東軍の諸将に対する^{こうしょう}行賞だが、これには、同時に^{しんぼうえんりよ}家康の深謀遠慮が、実に巧みにめぐらせられていた。例えば、^{ふくしままさのり}福島正則を尾張の清洲（二十万石）から安芸の広島（四十九万八千二百石）に移して、^{いけだてるまさ}池田輝政を三河の吉田（十五万二千石）から^{あさのよしなが}播磨の姫路（五十二万石）に移し、^{がもうひでゆき}浅野幸長を甲斐の府中（十六万石）から紀伊の和歌山（三十七万六千五百六十石）に移し、^{くろだながまさ}蒲生秀行を下野の宇都宮（十六万石）から陸奥の会津（六十万石）に移し、^{くろだながまさ}黒田長政を豊前の中津（十八万石）から筑前の福岡（五十二万三千石）に移し、^{ほそかわただおき}細川忠興を丹後の宮津（十八万石）から豊前の小倉（三十九万九千石）に移し、^{こばやかわひで}小早川秀秋を筑前の名島（三十五万七千四百五十石）から備前の岡山（五十一万石）に移し、^{たなかよしまさ}田中吉政を三河の岡崎（十万石）から筑前の久留米（三十二万五千石）に移し、^{ほりおただうじ}堀尾忠氏を遠江の浜松（十七万石）から出雲の松江（二十四万石）に移し、^{やまのうちかずとよ}山内一豊を遠江の掛川（六万八千六百石）から土佐の高知（二十万二千六百石）に移した。

第3話 江戸幕府の創立

とぎまだいみょう はいち 外様大名の配置

このように、客将、即ちこれまで家康と同列に豊臣氏に仕えていた諸将は、いづれも表面は大いに優待して、領地は広く、禄高は多くしたが、全て遠く離れた地方に移して、且つなるべく仲の善くないものを隣り合わせるようにした。互いにその勢力を牽制させようとしたのです。

又、従来の領地にそのまま置いて、新たに所領を加増した客将もあったが、これらは、例えば加賀の金沢（旧封八十一万石、新封百十九万二千五百石）の前田利長の如く、陸奥の大崎（旧封五十八万石、新封六十万五千石）の伊達政宗の如く、出羽の山形（旧封二十四万石、新封五十七万石）の最上義光の如く、肥後の熊本（旧封二十五万石、新封五十二万石）の加藤清正の如く、阿波の徳島（旧封十七万石、新封五十二万石）の蜂須賀至鎮の如く、いづれも初めから遠隔の地にいたものでした。

しんぼん ふだい はいち 親藩および譜代の配置

これらの客将を総称して外様大名といったのに対して、徳川氏の一族で大名となったものを親藩といい、徳川氏の家臣で大名となったものを譜代大名といったが、これらの親藩及び譜代は、これまでは家康の領地である関東のうちで、それぞれ一万石からせいぜい十一二万石を与えられていたに過ぎなかったのです。しかるに、今度は結城秀康（家康の第2子）が下総の結城（十万一千石）から越前の福井（六十七万石）に移り、松平忠吉（家康の第4子）が武蔵の忍（十万石）から尾張の清洲（五十二万石）に移ったのを始めとして、井伊直政は上野の高崎（十二万石）から近江の佐和山（十八万石）に移り、武田信吉（家康の第5子）は下総の佐倉（四万石）から常陸の水戸（十五万石）に移り、奥平信昌は上野の小幡（三万石）から美濃の加納（十万石）に移るといのように、この外なお五万石ないし十万石の大名が11家、それぞれ北陸、東海、東山および、関東地方の要所々々に封じられて、遠くから江戸を守護している形に配置されたのです。

しはいしや 徳川氏が支配者

要するに、家康はこの戦後の処分によって、秀吉の薨後、すでに天下が豊臣氏から徳川氏の手に移っているということの人々にはっきりと分かせたのです。自分こそ天下の支配者であって、だれに憚るところもなく、自由に、自分の名で、彼に反抗したものはこれを滅ぼし、彼に与したものには、領地を加増してやることも出来ることを知らせたのです。それで、従来、豊臣氏に従っていた諸将も、身の安全を思えば黙ってこれに服従する外は無かった。

この時、家康はまた豊臣秀頼の領地をも定めて、摂津、河内、和泉の3カ国にわたる六十五万石とし、その領内の政治を片桐且元に執らせることにした。そして従来、豊臣氏の直轄であった佐渡の金山、木曾の森林、および諸大名の領地以外の地はことごとくこれを徳川氏のものとした。

しょうぐんせんげ 家康の将軍宣下

こうして家康は、事実の上で完全に天下の支配者となったが、更に慶長8年（西暦1603年）2月12日、右大臣に昇進して、征夷大將軍に任ぜられるに及んで、名義の上でもまた天下の支配者となった。

第3話 江戸幕府の創立

時に年は62才でした。

この時、家康は伏見にいて、大命を拝したので、2月25日に参内して、お礼を申し上げ、10月に右大臣を辞し、11月に江戸に帰って幕府を開いた。さきに足利義昭が信長に逐われて室町幕府が亡びてから、ちょうど30年でもた武家政治が復興したのです。



徳川家康

信長および秀吉と家康との比較

ついでに言うが、信長も、秀吉も同じく武士で政治を執ったのですが、彼等は1人は右大臣、1人は関白として、即ち朝官の1人としてこれを行ったのであって、

頼朝や尊氏や家康のように、朝廷とは別に幕府を開いて天下を支配したものとは全く違っていたのです。

殊に秀吉は、九州征伐するにも、小田原征伐をするにも一々朝廷のお許しを受けたほどで、自分に武力があるからといって、気儘に天下の事を執り行うというような事は決してしなかったのです。

序でもうひとつ。家康は運のよい人だといわれている事を書き添えておこう。室町幕府に威厳がなくなって以来、凡そ100年間も乱れに乱れていた群雄割拠の戦国を平定し始めたのは信長ですが、不幸にして中道で斃れたので、秀吉がこれを受けて天下を一統した。2人は可なり苦勞した。(その詳しい事は、すでに第四巻の「室町・安土桃山時代」に述べておいた。) その天下を、家康はただ関が原の1戦で、しかも秀吉恩顧の諸将に最も多く戦わせて受け取ったというのです。

織田が搗き羽柴がこねし天下餅 骨も折らずに食うは徳川

という狂歌は、この3人の関係を露骨に、だが巧みに言いあらわしたものとして、人口(世人の噂)に解釈している。けれども、彼が諸将に骨を折らして、自分はいはいて働かずにその功だけを収めたところが、所謂将に将たるころであって、又、この機会を掴むまでの間、有為の材を抱きながら、どこまでも隠忍していた跡を見ると、そこに彼が信長や秀吉に比べて、更に一層偉大な政治家であったところが窺われもします。世にホトトギスを題として、信長、秀吉、家康の3人の性格を評した狂句がある。

(信長) 鳴かぬなら殺してしまえほととぎす

(秀吉) 鳴かぬなら鳴かして見せうほととぎす

(家康) 鳴かぬなら鳴くまで待とうほととぎす

というので、さすがに善く穿っています。

(第3話 江戸幕府の創立 終わり。 次は前頁に戻り、第4話 豊臣氏の滅亡)